

G.R.  
白雲郷

とりにあ



18

昭和46年4月1日

## 不動明王のご利益について

表紙の不動明王は、今建立中の救世大観音堂宇内に安置する為、檜材を以って謹刻した総高三米の尊像です。不動明王は大日如来の忿怒身で、五大明王の最高位に在ります。

普通、片目が半眼で、二牙があり、右手の<sup>ケンサク</sup>羂索で衆生を引きつけ、左手の剣でその苦難を断ち切ると云う、強力な慈悲相を現わしています。<sup>ケンゾク</sup>眷属は八童子ですが、普通右に制叱加（セイタカ）童子（忿怒の相）と左に矜羯羅（コンガラ）童子（慈悲の相）の二童子が脇立になっております。（彩色 平沼浄先生）

## 目次

- 表紙……………不動明王 桐江作
- 印度附近の旅路（その八）……………桐江 1頁
- 西遊記（その十三）……………岡部千三 9頁
- 道元禪師（故瓏仙猊下）御法話（その一）……………14頁
- 観音経について（現代に生きる観音経より）光山善雄先生 17頁
- 壹万體観音奉納者芳名（第四集）……………19頁
- 特別寄進者芳名……………22頁
- 終了した行事……………22頁
- 壹万體観音奉安申込用紙……………23頁
- GR白雲郷花のお知らせ その他……………24頁



## 印度附近の旅路

(其の八) 桐江

### 玄奘三蔵法師続篇

#### 玄奘の密出国

玄奘法師が十年余りも中国の多くの高僧に教えを受けたが、皆説くところの仏説が異っている。「この疑問を解決するには、天竺に行つて原典により本場の學者に教えを乞ふより外にない」と決意したが、当時唐は国外に出る事を禁じておつて何度願書を出しても却下されたので、玄奘は遂に密出国を決意して、万里の長城の南端、玉門関の関所にたどり着いたのですが、此処でつかまつては大変と迂廻して急流ではあるが川巾の狭い所に大木を切倒して橋とし之を渡り関所破りに成功し、いよいよ荒れ狂うタクラマンの大砂漠をラクダの骨を道しるべに旅をつづけて、幸いオアシスに着いたので渴ききつた喉をうるおしていたところ突然矢が飛んで来た。其所には第二の砦があつて捕えられ

て送還されようとしたが、折柄居合せた老僧に助けられて、又、砂漠の旅を続けました。其時目の前に盜賊の大集団が隊商を襲つて皆殺しにし、駱駝諸共商品を奪い去る竜巻きのような恐ろしい情景を近々と見た玄奘は、命拾いをして漸く高昌国に着きました。

#### 高昌国

大国を誇る高昌国王は、玄奘の高邁なる仏説と人物に感激し「どうぞ永久に当国に止まつて頂き度い」と礼を尽して懇願したり又強迫したりしたが、玄奘は断食迄して之を拒んだので国王も遂にあきらめ、帰途には必ず立寄る事を確約して、これより先き通られる二十四ヶ国に依頼状や沢山の贈物を賜つて、涙乍らに玄奘の壮途を見送りました。

#### 天山山脈越え

高昌国王の盛大な見送りを受けた玄奘は十数ヶ国を通り、銀嶺の難所を越えた所で又群盜に襲われて今度は丸裸にされたり数日も水を呑む事が出来ず、幾度か砂漠の中に倒れると云うような色々の苦難を乗り越越え珍らしい十数ヶ国を通りぬけていよいよ大難所である七千五百余米の氷河に覆われた、天山山脈を八日間も





かかって越えたのですが雪崩や猛吹雪などで一行中二十余名や馬が凍死する等の苦難に遭いましたが、漸く之を乗り越えてスイアブ国に着きほっとしました。此所は遊牧の民で王城は数百人も収容出来る小山のような大天幕が沢山並び実に壯観であり又、天幕の内部は目もくらむような美しさです。此国は火を崇拜して居るので、火を含むと云う木に腰をかけるのは許されないので木の椅子は無いのです。

王は群臣を集めて歓迎の大宴会を催したが、そこで

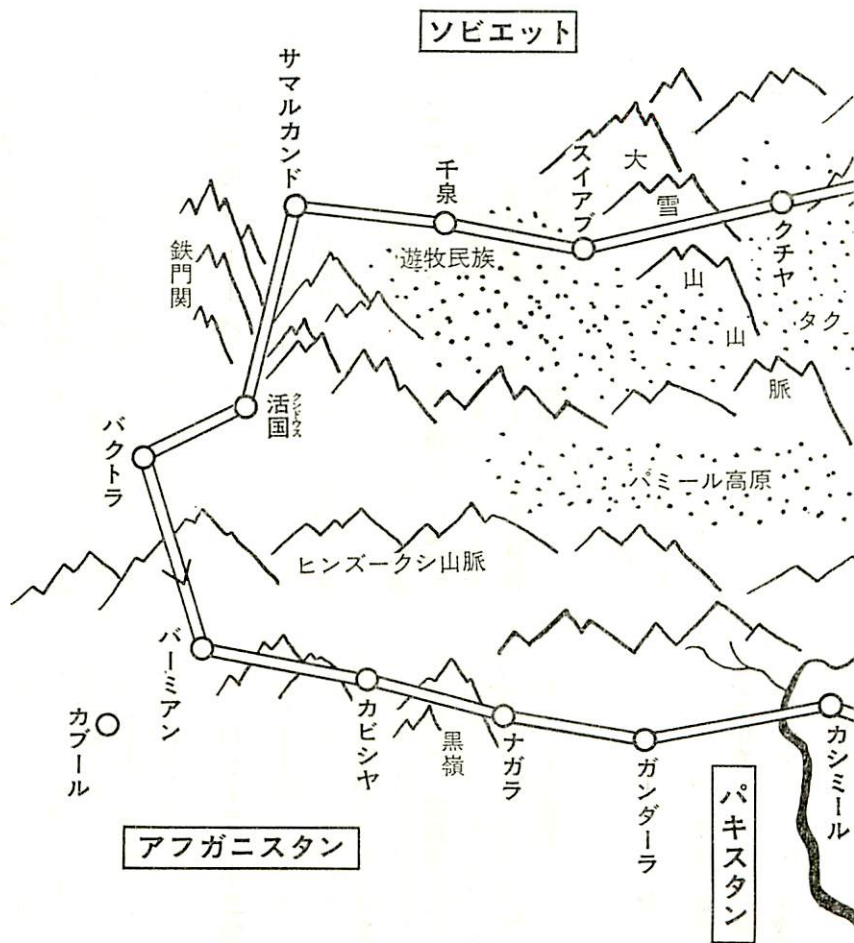
玄奘の十善の大法話に一同感激しました。そして数百年も泉池のある美しい千泉国や遊牧の民族の沢山の国々を通過して、サマルカンドに着きました。

### サマルカンド

サマルカンドは砂漠の中のシルクロードの中心地であるため非常に繁栄で之を支配する西突厥国(トルコ)に非常に高い税金を納めて居るおかげで武力で隣商を盗賊から擁護してくれております。

この国には二つの面白い習慣があります。

赤ちゃんが生れると口に蜜をぬるのですが是は商談が巧妙になるようにとの事ですし、また、赤ちゃんの手に膠かかわを塗るのは此の膠のように物や金をつかんだらほなさないと言う強欲な呪まじないで徹底した拝金主義であります。また今一つは珍らしい



天然石を見つけると之を礼拝供養すると云う拝石教であります。また此の国はベルシヤ系の拝火教が盛んで排他的なので仏教寺院は二ヶ所あるが仏僧は居ないのです。処が玄奘の隨者二名が之を知らず此の仏寺にはいり礼拝したところ松明をふりかざした群衆がなぐり込みをしたので仏僧はあわてて逃げました。此の仏僧は玄奘の隨員なので国王は之を逮捕しましたが、玄奘の懇望により鞭打ち刑で追放しまして、之により仏教寺院にも仏僧が住するようになり仏教が盛んになりました。

## 鉄門関の関所

サマルカンドと別れて鉄門関の難路に入ります。鉄のような黒い無気味な数百里もある絶壁の間の細道を通るのですが、そこには鉄の関所門があつて大きな鈴がつけてあり、通行税を取ると云う有料道路です。

## 活国グンドスのソトーバ

この難所を越えると活国ですが、其の近くに、バリー城があり、そこに仏教史上最初の有名な卒塔婆が建つています。

釈尊がブダガヤで成道され、ベナレスに行かれる途中でトラブサとバリーカと云う二人の商人に出遭われました。商人は体から後光がさしている釈尊を拝むと蜜を差上げたので釈尊は有難い法話をされた。商人は感激して「国に帰り供養したいから何か頂かして下さい」とお願いしたところ釈尊は髪の毛と爪を商人に与えました。商人は又「頂いた品を供養したいのですが其の方法を教えてください」とお願いすると釈尊は僧衣の上を着をぬいで四角に折りたたみ地上に置き、次に下衣を同じく四角に折つて其の上に重ね、更に其上に法鉢を伏せて其の中央に錫杖を建てて、「之が儀式を行う仏

塔である」と教えたので商人は大いに喜んで帰国後、釈尊から頂いた髪の毛と爪の納めた三丈余の塔を建立した。之が卒塔婆の仏教史上最初の創建でガンダーラ式仏舍利塔の基となったとの事です。

玄奘も此の塔を見て早く仏教の眞の法を極めたいと決意されました。

## バクトラ（小王舎城）

バクトラ国は二千六百米もある高原の国で、小王舎城とも言われるだけあつて仏教の盛んな国で、玄奘は始めて大仏教国を見て非常な喜びでした。

其所には立派な仏像や宝物等、善美を尽した大寺院があるので、突厥王は此の寺内の宝物を奪おうと大軍を引きいてこの寺に押しよせたところ、其の夜、毘沙門天が現われ、戟で王の胸を刺し通された夢を見て王は驚き、早速幕僚を寺にやり懺悔・陳謝させたが、使者の帰らぬ内に王は急死しました。

## バーミヤン

バクトラから悪霊や盜賊が横行すると云うヒンズークシ大山脈は幸い無事に越える事が出来て、二千六百米もある高原の国バーミヤンに着きました。



此所には数十ヶ所の大寺院や百五十尺の大石仏や三キロに亘る岩窟寺院等、雄大な仏跡がある事は前号に記載しているので省略します。

### 此所迄の旅程一万里

玄奘法師は此所迄に一万余里の旅程と三十数ヶ国を旅行して、やっと仏教の盛んなガンダーラ地区に辿りついて天竺近しと喜ばれましたが、玄奘が此の大旅行をなし得たのは第一が僧侶であった事、鉄のような意志の力と健康、殊に智徳高く至る処、王侯に敬仰され其の庇護や観音様のお助けによるものです。

鳥居観音発行のしおり「とりゐ」に連載されている奇想天外の西遊記は、此の辺迄の玄奘のあらゆる苦難を取り入れたものであります。

### カピシヤ国

玄奘は感激のバミヤンを出発して吹雪の荒れ狂う峻嶺で二日間も道に迷ったが、幸い親切な獵師に導かれて漸くカピシヤ国に逆り着く事が出来ました。

この国はさすがに印度の空気が漂う仏教王国であります。国王は毎年五・五米の銀の仏像を作り無遮大会と云う法要をして貧民に布施しております。又域の

東にセリカ寺と云う大寺院がありガンダーラ国のカニシカ王は人質の某国の王子をこの寺に住わせ保護したがこの王子が後に黄金や寶石をこの地に埋め「伽藍が朽ちたならこの宝で修理せよ」との碑を建て其の頭に鸚鵡をのせた大神王の像を造って安置しました。

ところが此の埋れている財宝を掘り出そうとするとその鸚鵡が羽ばたき鳴き出し地震が起るとの事でも恐れて掘る者はなかった。併し玄奘は懇望により祈りをこめて掘り進むと、銅器の中に黄金数百斤と沢山の寶石があったので、是れで大寺院を修理する事が出来ました。

けわしい山嶺を越えるとナガラハラ国で此処には次のような伝説があります。メーカーと云う青年が居て燃灯仏（釈迦の前身）が来られると云うので蓮の花を供養しようと思ったが売り切れてどこにもない。其時一人の少女が邸内の池から七本の蓮の花を持って来たので青年は「売ってくれ」と頼んだ処が少女は「私と結婚して下さいなら売ります」と云ったので青年は是も仏縁と大いに喜び共に城門外の道端に仏を迎えました。処が道路に敷きつめた白布が足らぬところがあるので青年は頭髮を其のすき間に敷きつめて仏に通って頂いたと云う事ですが、是は鳥居観音本堂の野生司画

伯の天井絵にあります。

## ナガラ国の大洞窟の仏契

又、危険な黒嶺も無事に越えて辿り着いたナガラ国にはカニシカ王が建てたと云う三百尺の仏塔、其他仏跡や伝説が沢山ある所です。其の西南に熱心に祈れば仏の姿が見えると云う大洞窟があります。

昔、竜が羊飼いに变身して王に仕えていたが乳酪の捧げ方が悪いとののしられたのを大いに恨み、岩壁から投身自殺してこの洞窟の大竜王と云う昔の姿にかえって人々を苦しめているので、仏陀は神通力を以て此所に姿を現わし、竜王を諭して悪業を止めさせた。そして仏陀は「わたしはぢきに世を去るが汝の為に、この岩面に影を止めるから悪心が起ったらこの影を見よ」と言い残されました。

玄奘はこの話を聞いて、亦と見る事の出来ぬ仏陀の真のお姿を拝し度いと云う一心から、盗賊や毒蛇等の出ると云う危険な山道を登ると案の定、盗賊が五人現れて「坊さんは此辺に賊が出るのを聞いてきたのか」と言うので玄奘は「聞いて来た。併し賊といえども仏僧から見れば皆、人間である」と答えると賊は玄奘の気高い姿と抱擁力にななごみ一緒に岩窟に行きました

玄奘は真暗な洞窟に数十歩位はいり、熱心に礼拝してお経を唱えたが何の異変も起らない。そこでお姿が現れる迄は断じて動かないと、一心不乱に誦経し礼拝を続けた。すると不思議や光明の中に如来の御姿がだんだんはつきり見えて来て、五人の賊も此の有様を見て驚き改心したと云う非科学的であるが、私は仏教信仰に徹した玄奘によって如来の御姿が現れたと云う此の神秘を信じ度いと思います

## ガンダーラ国

ガンダーラ国は仏教を信ずるカニシカ王の治める国で全域にわたりギリシャの技術を取り入れた伽藍、仏塔等仏教美術の華はなと言われた所ですが、玄奘が辿り着いた時は非常な荒廃ぶりで榮枯盛衰の有様をまざまざと感じられました。其処には高さ四百尺、基壇一里半と云う最大級の仏舍利塔がありましたが落雷等で三回も焼けたが、其の火煙は天女の如く又竜王が雲を呼んでいる如くで見る人々皆空恐ろしく感じたとの事ですから、カニシカ王が狩りに出た留守に母が死亡した其時、如来が現れて仏法を聞かせたところ生き返った。王は宮殿が赤々と輝いているのを見て大急ぎで帰り生き返った母から「仏様は、わたしは今からクシナガラに行



き世を去るから私の遺骨を受けて供養せよ」と仰せになつたと聞き大急ぎクシナガラに行った処、已に入寂された釈迦のお骨を分けているところであつたが、カニシカ王を田舎者あつかひして分骨をこぼんだが其時天空より「仏の御遺志を尊重せよ」との声があつたので漸く分骨してもらつて王は城に帰り、建立したので此の大仏舍利塔だとの事です。

この附近にある伝説を二、三書いてみます。

(1) 遠い昔、如来が慈悲深い王様になつて居られた時に雲山に住んでいた婆羅門が、王の頸を欲しいと申し出た。諸臣は驚いて之を止めたが聞き入れません。婆羅門は頭髮をわしづかみにして木につるし、王の頸をチョン切つたとの事です。

(2) 昔マハーサットウ王子が山林に入ると一匹の虎が七匹の子を生んで間もなく腹ぺこでやつれはてていた。王子はあまり可愛そうなので自分の穢れた肉体を捨てて無上涅槃を得度いと母虎の前に身を投げた。虎はあまりにも衰弱して之を食う力がなかつたので、王子は竹ペラで自分の体を破り流れる血をなめさせたので虎は元氣を取りもどしガツガツ王子を食べてしまいました。其辺の草や木は今も赤色で当時の凄惨を物語っているとので事です。

(3) ガンダーラのサンシャ王の王子は敵国から求められ国宝の大事な白象を与えて国民から反抗された。又婆羅門の求めに応じ自分の大切の子供二人を与えた処、婆羅門は二人の子供をムチで打ちすえた。次に王妃が欲しいと云うので最愛の妻を与えた程の布施行者でありました。此のような伝説が沢山あるのは仏教の根本は慈悲心である事を表したものでしょう。

(4) 此の近くのヒラ山は如来が生前婆羅門の姿であられて教えを聞き度いと願つておられた処、羅刹が現われ「諸行無上、是生滅法」の二句をとなえた。婆羅門は歡喜して「後半を教えて下されば此身をあなたに供します」と約束したので後半の「生滅々已、寂滅為樂」と唱えたと婆羅門は満足し喜んで岩上より投身し羅刹に食われると思つたが羅刹は帝釈天の姿となり之を空中で受け止めました。

法隆寺の玉虫厨子に以上のような伝説の絵があります。すことは皆様御承知の通りであります。

## 鬼 子 母 神

インダス河の近くに鬼子母神の有名な伝説があります。鬼子母神は千人の子供を持っているのに他人の子をさらつて食つて了うので親達は恐れ悲しんで居つ

た。釈迦は之を哀れみ、鬼子母の末の子を一人隠してしまつた。鬼子母は氣違ひの様になつて、この子を捜しまわり疲れはててしまつたのを見て釈迦は赤子を返してやり、「今後は柘榴の実を食べよ」と教えたので、鬼子母は始めて世の母の心を知り世の中の子供を守護する神となり、日本でも信仰されております。

柘榴はガンダーラ地方の特産とみえて立派なのを沢山売っており、私もカプールで十二センチ位の柘榴を買つて食べましたが人間の味に似ているかどうか知りませんが、日本のものとは違い実に美味で一箇で充分満腹致しました。

## カシミール

カシミール国はヒマラヤに接したインダス河の上流でガンダーラ地区の東端であります。此所は風光明媚であり住民も容姿よく又仏教も盛んであります。

カニシカ王の時、此所で第四回目的結集(二百年に一回)が行われて沢山の仏典を編纂されたので玄奘法師もここで二年間勉強されました。

## ガンダーラ地区の盛衰

ガンダーラ仏跡は、アフガニスタンからパキスタン

に亘る広大な地域で紀元一世紀から数百年の間、隆盛を極めました。其後回教やモンゴル、アレキサンダー等の進入により破壊されたり、又仏像や塔は石灰やシツクイで造られたものが多いため風化も甚しかった様です。

現在盛んに発掘中ですが、掘り出されたのを見ると、印度とは違いギリシヤ式の独特な立派な仏教美術には驚く外ありません。

カシミールから東南の印度全域の旅行記はとりゐる三号に略記しました。

玄奘は帰国後、死ぬ迄沢山の仏典の翻訳やらこの大唐西域記十二卷(百三十八ヶ国)を編纂されたので、この私の記事は大唐西域記の九牛の一毛にも足りませんし甚だ興味のない事を恐縮しております。

併し白雲山鳥居観音の境内に建立されている玄奘三蔵塔は、日本大乘仏教の大恩人であり偉大な人物である玄奘法師の頂骨を奉安してある重要なもの故、将来日中関係が改善された暁には日中親善に大きな効果を表すものと確信して、法師の功績の一面をしのび度いと思ひ、あえて此処に略記したものです。



## 西遊記（其の十三）

岡部千三

### 供となる猪八戒

「ばけものときくや、悟空は、元気づいた。またひとあばれしてやるうと思つたからたまらない。くりくりとした瞳はものすごい。」

「そのばけものは……なんと云うやつだい」

「はい、……それは、むすめのむこです。……きいてください。わしはな高太公、むすめは高才、と云つて三年前に、むこをもらいました。……そのむこが、はじめのうちは、かわつたところもなかったのですが、この頃では、はなが高くつき出し、耳は大きくたれさがつて、おそろしい顔になりました。そのうえ、食べものは、五十人分ぐらいペロリです。あまりのことにこの家からおい出そうとすると、それこそ……あばれまわつて、わたしたちをくるしめます。そんなわけであなたがたに、ごめいわくがかかつては大変です。泊めてあげるわけには参らないのです」

「なんだ。はな高の耳さりのばけものか。おそれる

ことはない、わたしにまかせてくれ。わたしはな、天上で齊天大聖と云う位をもらった。すこしはえらい者だから、ばけものぐらい平気さ」

「ではおねがいたします。しっばいするようなことはないでしょうね」

「だいじょうぶ。……大船にのつた氣でいるがいい。そうでしょう、お師匠さま」

悟空は、法師と、ばけものたいじの方法をそうだんした。

悟空は、まず、むすめをかくしておいて、自分がむすめの着物をきて、部屋にはいった。そして、今か、今かと、ばけものくるのをまつていた。

やがて、ごーつと云う風の音がして、どこからともなくばけものが出てきた。

「もどったぞ。主人がかえつても、出むかえないのか」

ばけものは、つかつかと悟空のそばへくるなり、どなりつけた。

「しらん顔をしているとは、ふとどきもの。そんなよめは、ここからおい出してしまふぞ」

「なにを云うか、かつてなことをもうすな」

悟空は、いいかえして、むすめの着物をぱっとぬぎ





れ。お前のいうことなどが、本当にできるものかい。  
こっちへこい」

悟空は、ばけものの耳をつかんで、法師のそばへ引張ってきた。

ばけものは、三蔵法師にむかって、くわしく身の上を話した。

「もとは天上にいて、天の川をまもっていたのですが、悟空とおなじように、いたずらがすぎて、玉帝から、天上をおいだされたのです」と泣きながら語った。

「わかったそう云う話をきいたことがある。あれが前だったのか。では、わたしについてくるがよい」

法師のゆるしのできたので、はな高で耳さがりのばけものは、すっかりよるこんでしまった。

法師は、ばけものが、先に観音さまから、猪悟能と云う名をつけられていたのをすこしかえて、猪八戒とよぶことにした。

猪八戒は、悟空のかたをたたいて話しかけた。

「きょうだい。お前が孫悟空で、わたしが猪八戒。ふたりともいい名だよ。お前もつよいが、わたしもよわくはないぞ。ふたりそろっていれば、おもしろさまにどんなことがふりかかって、まずしんばいはないな」

「いばるな。わかるものか。お前なんか、たよりになるものか」

悟空は、そっぽをむいた。

「おまえみたいなの、いのししのようなやつに、きょうだいなんて云われると、気もちがわるいや。でも、おもしろさまが、お前をけらいにするとおっしゃるのだから、しかたがないさ。がまんしてやるからこれからは、わしの云うことをよくきけよ」

「いいとも。きょうだいの云うとおりにするよ」  
「じゃ、おまえが荷物をつづけ」

悟空は、猪八戒におしつけてしまった。

猪八戒が、心をあらためて法師のおともをしていくと云うので、高太公も娘の高才も、ようやく安心した。

「ぶじに天竺へおつきになるよう、おいのりします」

と、法師、悟空、八戒の三人を、村はずれまで見おくった。

### 黄風大王

猪八戒は、三蔵法師の云うことはよくきいたが、孫悟空には、なんだかんだと口ごたえをした。おまけにいつもおなかをすかして、たべることはかり云っているので、これには、法師もあきれてしまった。

「八戒、天竺は遠い。とちゅうには、もつともつとくらしいこと、つらいことがあるだろう。お前のように、たべものことばかり気にしては、とてもこのさき、がまんできないと思うから、こころでかえってはどうかな」

「それみる」と、そばから、悟空が口をだした。

「おまえがいると、おししょうさまに、よけいなしんぱいをかけるばかりだ。くいしんぼうのいくじなし。さつさと、いってしまいがいい。おともは、悟空さまひとりでたくさんだ」

八戒は、びっくりした。

「きょうだい、そんな、ひどいことをいってくれるなよ。わしがわるかった。これからは、腹がへつても、ひもじくない、と云うことにする。だから、ゆるしてくれ。な、きょうだい。おししょうさまにたのむ。このとおり」

まじめな顔で、ぺこぺこあたまをさげてたのむのだ。つた。

「きつといわないな」

「きつといわない。腹がへつてもがまんするよ」

「ではゆるしてやる」

悟空は、法師のかわりに、胸をそらして威張った。

それからいく日かたって、ある山をこえようとしたとき、さつとあやしい風がふいてきた。なまあたたくく、気もちのわるい風なので、悟空は、仙術をつかつて、ひょいと、風をつまんで、はなにあてて、においをかいでみると、やっぱりただの風ではない。

「おししょうさま、なにかやってきますよ。八戒、おまえも気をつけろ」

云うまもなく、

うおうと一声。一びぎの大虎が、やぶの中からあらわれた。

おどろいた白馬は、ひひーんとおどりあがり、そのひょうしに、法師を、どつと地上に、はねとばした。

「このぶれいもの。虎のくせに、生意気なやつ」と八戒は、まぐわをふりあげて、虎にうってかかった。

すると、虎の口から、人間のことばが、とびだした。

「はははは、わしはただの虎ではないぞ。黄風大王のけらいだ。大王の酒のさかなをさがしにやってきたのだ」

いいながら、虎の皮をすばやくぬいで、おそろしい怪物にかわり、法師めがけて、つかみかかろうとした。

「こいつ、とんでもないことを云う。このまぐわの泥でもなめておけ」



猪八戒は、まぐわをふりまわしふりまわし、怪物をうちとろうとものすごい態勢である。

悟空も、じつとしてはいられない。

「おししょうさま。八戒だけではかてそうもありません。わたしも行きます。しばらくのあいだここにておまちください」

如意棒をふ

るって、八戒のすけだちにとびだした。

こちらはふたりで、あいてはひとり。

これではばけものもかなわない。もとの虎になってにげだしたが、ひとりぼっちの法師をみると、「しめた」とひとりごと



云をいながら、くるくると、また、虎の皮をぬぎ、その石にかぶせた。石は虎がねているように見えた。

「これでいい。あのふたりが気のつかぬうち、法師をさらってつんにげよう」

怪物は、三蔵法師をかかえて、黄風大王のいるほら穴へ、つれて行った。

「大王さま、酒のさかなをつれてきました」

「そうか。うん、うまそうなさかなだ」大王が、法師に手をかけようとした時、手下が、あわててとびこんできた。

「大王さま、大変です。その坊主のけらいと云う、やつが、やってきました。あれあれ、あの足音をきいてください」その足音はまさしく悟空と八戒のものであった。 つづく



## 道元禪師(故瓊仙猊下)御法話

(瓊仙いかだ集より)

(其一)

### (一) 病は生きることの救い

禪師は、病は人生における生老病死の一条件であるから、天寿を全うするためには平素から養生を大切に心掛けるようにと、常にお仰せになりました。病は気からと申しますように、心の持ち方が大切ですが、それでも多くの人々が、病に苦しんでいるのを見兼ねて、心の底からにじみ出るような、暖かいおさとしをなさいました。

即ち気の持ち方、養生の仕方、意外に早く回復することもあると次のように申されました。

一、医師を信頼し其指図を守り、すなおな心で養生し、わがままのふるまいはいけません。

一、天与の生命は大切に保持するよう心掛け、寿命ある限り、病は必ず治癒するものと信じ、心を寛くもって下さい。

一、病気になる、とかく心がいら立ち、悲観しがちですが、身と心とは、元々一つです故、心気おちつけば、自ら平癒することを忘れてはいけません。

一、看病する人には、与えられた尊い救いの手伝を受けるものと心底から感謝することです。

禪師は、更に神仏を念ずることも、病を癒す大切な要素であるとお仰せになり、神仏の不思議な力を信ずべきであると強く申されました。

誰れでも、病気になれば、生か死か、二つに一つしかないとは知り乍ら、何やら心がかりのものが、病氣してもくすりなしで十中八九は治療する力、即ち生命力……、これこそ生への救いの光明でありましょう。

白隠禪師の教えの中に「平生を臨終と思へば、臨終は平生なり」とありますが、至言と申せましょう。

### (二) 観音さまと同化の信仰

お釈迦さまが、人類の苦を救うため、此の世にお遣しになった観音さまにつきまして、すでに皆様御衆知の事です故、禪師の御法話の中からいくつか書きましよう。

観世音菩薩を救世大王とも申し、或は観自在菩薩とも申します。即ち大智慧の力をもって真理の光明をおとらえになっており、亦救世する自由自在の活動力をもっておられます。経文には三十三通りに御姿を変えて、大慈悲心の救済におでましますが、とても三十三

通り所ではありません。

魚籃観音の一例を申しましょう。

魚を入れる籃をもった美女にお姿を変えられて、信心をもたない土地へおいでになりました。多くの若者からお嫁さんにほしいと申し込まれました時、一つの宿題として観世音普門品を誦する人に嫁入りする旨を申された処、大部分の人が読みました。そこでだんだんと、むずかしい宿題を出して、遂に法華経八巻を三昼夜で覚えた人にと云うことになりましたらば、一人だけ及第しました。

そして約束通り其の家へ迎え入れられましたが、其家の一室に入られると、その婦人は死んでしまいました。

一同悲しみの内に葬儀を終えた頃、一人の旅僧が来て、墓地へ案内させ、一同立会って墓を撥いた処、其の婦人の死体はなく、黄金の骨らしい一片だけが出て来ました。

僧曰く「これは観音さまの化身である」と云い終りそのまま立去りました。それ以来従来無信仰であったその地方が大信者の中心地になったと記録されております。

大智慧、大慈悲、大活動、この三つの力に充実され

ている観音さまを信仰出来る歓喜は何物に替え難い有難さを覚えます。観音さまを理想として、自分自身が即ち一人一人が観音さまになって世に活動していただきたいものです。これを「同化の信仰」と申しまして、生死を超える精神力の根元ともなるのです。

### (三) 耐え忍ぶことの尊さ

釈尊は忍耐のむずかしさを説かれたなかで、其修養は特に婦人に必要であると申されています。

どれ程善根功德を積んでも一度腹を立てれば焼けてなくなりませぬ。婦女の美しくしさの根元は心であり、鏡に向う時は、心の中まで見透して身つくろいして下さいます。天神の歌に、「さし出るほこさき折れよとことごとくに、おのが心をかなづちにして」とあります。

勘忍の心掛の第一は、安受苦忍といって辛棒することなのですが、これがむずかしい。人に欲望ある限り「衣食住」で不足を感じない人は少くないですが、

二宮尊徳翁の歌に「木綿着物に身を助く、その余はわれを責むるなりけり」とありこれを守れば、衣について不足はない筈です。食住も亦同じです。

都会を遠くはなれた片田舎で、平和に暮らしていた、ご夫婦が、東京見物に来た時、妻が不必要な高価な着物をほしがったのを、夫が買わせなかったため不和に



なつた物語りは吾々に悲しみを覚えさせます。常に自制心を養うことが必要で「こと足れば、足るにまかせて、こと足らず」と云われ数々のご法話をお仰せになりました。亦耐怨害忍に付て、仏法の菩薩とは、他人を勝たせるために、自分が負ける心構えを指す言葉であり、「結局負けるが勝」の意です。亦軟徳という語があり何事も柔かく受流せばすべて争いは起らず、婦人に特に必要と説かれています。

争いの絶えない家の人が、夫婦親子共々至極円満な家へ遊びに来て、「あなたの家はおだやかですが、秘訣を教えてほしい」と云つた時、その家人は、「秘訣なんかありません。私の家には、「利巧者」が居ないので争いにならないのです」との物語りは、自分を利巧者にするため、徳を失っている人が如何にみじめなものかわかります。

「悪言はこれ善知識なり」と仏教は教え、悪言は自分のために言われた有難い注意だと思ひ、人はこの世に客に来て居ると思えば勘忍出来る筈なりと、説いておられます。

#### (四) 現身說法

大変難かしい言葉のようですが、その道理は古人の語にある「一丈を説き得んに一尺を、或は一寸を行な

うにしかず」でありまして、説法は言句の説法が目的ではないのです。

如来(仏)は金剛經に。

「わが説法は筏喻(ばちちゆ)の如きものと知れ」と申されました。(筏はいかだ、又は船を指し喻は教え訓す意です)即ち筏や船は人々を彼岸に達する道具です。道具はすててしまつてもよいが、真の説法こそ目的でありまして、一そうわかり易く申せば、互いに身を以て、他人に道德的感化を与えることが、即ち現身説法であります。

菩薩が長い時間を御修業なされた結果、大智大悲の力をもって威嚴と柔和の妙相を具足されましたので、御像を拝見しますと己れの心が柔和になり、且つ凛として、冒し難い威嚴にふれます。

現身説法の悟り方もいろいろで、靈雲という人は、桃花を見、香嚴と云う人は竹にあたって響く音で悟られ、お釈迦さまは、明星の輝きをごらんになつて大悟遊ばされたように、目で見、耳できく、あらゆるものが、昼夜を問わず、生き身の吾々に法を説きつつ、悟りを与えております。

(以下次号)

## 観音経について

現代に生きる  
観音経の著者  
光山善雄先生

世の中が如何に変わり、如何に生活が向上しても、生、老、病、死のある以上、宗教はなくなりません。

電灯やラジオのない山奥にも寺院があるのを見ても宗教は人間生活に根強く結びついて居ります。

仏教は五億五千万人、カトリック五億四千万、回教四億三千万、ヒンズー教三億三千万、新教二億、ギリシャ教一億四千万、ユダヤ教数千余万、其他原始宗教等、人間の居る処に宗教は必ずあります。

そして仏教の内容を見てもアジアの仏教のある処、観音信仰のない処はありません。

### 観音経の有難さ

観音経を説くにあたり、先ず観音さまを信ずることでありませぬ。

観音様とは、正法明如来が衆生を助けんが為めに、大慈大悲の観世音菩薩となられたのです。

観音様は宇宙に充滿して居られて、一切の人類で御蔭を蒙らないものはない事は、普門品に「十万国土に

刹として身を現ぜざることなし」とあります。

また世間の苦悩を除いて下さるのですから朝夕に観音経を口にとなえ心で読む事です。観音経を心で味えば、必ず喜びが湧きますので、観世音菩薩の名号こそ主体であり、生命であり、又光明であります。

「無量百千万億の衆生ありて諸の苦悩を受けんに、一心に観世音菩薩の名を称せば観世音菩薩は、即時に其の声を観じて皆解脱することを得ん」と観音経にある如く、一心に観音の御名を称すると「われ観音の分身なり」と観音さまと一体となる自覚が湧き出ます。

### 日本の観音さまの歴史

聖徳太子は厚く観音さまを信仰し、自ら観音の分身なりとして三経の義疏や十七条の憲法を制定されました。そしてゆめ殿の観音堂で「深入禅定」と観音様からの御指導を受けられ太子自身が観音様になられた。

光明皇后は厚く観音様を信仰されてその慈悲を行うべく浴場を開設して庶民の体を洗われました。またライ病患者に救の手をのべ九百九十九人の身の垢を落され千人目にウミ血の流れるライ病者が出て来て「どうぞこの業病のウミをお吸い下されば全治するとの事ですから尊い方に申してすみませんが何卒御願い申しま

す」と光明皇后に御願いしましたので「ハイよろしい。誰にも別はないのです」と仰せられて、患者に口をつけてそのウミ血を吸われ、患者はその布施行に驚きと尊敬を捧げました時、患者は観音の姿となりました。

皇后は観音様が慈悲の行を試すためにライ病患者になつたのであらうと信仰はますます強くなりました。この奇蹟は世界の歴史になき慈悲行にて、信仰なくして出来ることではなく、全く観音経の実践であります。

推古朝、奈良朝時代の国宝的美術品には観音さまの仏像が多くを占めています。これ全くその時代の信仰の結晶にして単なる美術品ではありません。

平安朝になりましても各宗派を超越して観音信仰は繁榮して居ります。

西国三十三ヶ所の霊場は今日尚多くの参拝者で繁榮して居りますことは、国民の心の中に親しまれ、とけこんでいるからでしょう。一応観音経を手にとれば、短い経文ではありますが、心の灯として、心の糧として、心の支えとして、今後世界人類の灯となるものであると信じます。

## 観音様の御利益

日本の仏教界は各宗派に分れておりますが、観音の

信仰は排他性がなく寛容性を有し、いかなる時代、いかなる民族にも愛される美しさをもっていることは事実であります。この一巻の經典の中によく、真・善・美を説き、火難・水難・風難・劍難・悪鬼難・囚難・賊難等の七難を除き、内心より来る淫慾も観音さまを恭敬せばこの欲を調和することが出来ることと説き、また三十三身をもつて、即ち無量無辺の身を応現せられて説法なし給うと云うその威神力とその抱よう性に魅力を感じます。

海の中の魚は、水をはなれては生きられないので、それが大暴風雨に会つて砂の上にうち上げられて正に死ぬか生きるかの危機に魚はもがいて居ります。其の魚を生かす方法は水の世界にもどすことです。親のフトコロに帰えずことです。

現代人もこの台風に直面した魚の如く、苦悩にもがいて居ります。衣食住に不足のない人でも、四苦八苦と悩んでいる人が多いのが現代の世相です。これを救う道は観音様の御心に帰える外にありません。いわゆる観音さまと、はなれない生活実践をすることです。

自分は観音様の分身であると自覚すれば悪事に走る事も出来なくなります。

朝に夕に観音様と一体となつて生活する事こそ、現代人の生きる道であると確信致します。













## 老万体観音奉納申し込み用紙

区分	A B	供養靈位（何々家祖先代々又は御戒名）	御住所	御芳名	号数	取扱者

建立中の救世大観音の体内及堂宇内に、老万体の観音像奉安をおねがい申し上げましたところ、広く有縁の方々から五千三百余体のお申し込みに預りました。定めしこれらの祖霊は観音の偉大な功德のお力に守られ極楽の喜びをお受けなさること存じます。何卒この浄業が達成するようにご勸進申し上げます。

永代 供養料

観音像 A（三三種）五千元 B（二五、五種）三千元

御払込次第御仏壇用小観音（一八、八種）を御送り申し上げます。

御払込先

埼玉銀行名栗支店 又は 埼玉銀行練馬支店

御申込書送り先

鳥居 観音 埼玉県入間郡名栗村 電話 ○四二九七〇四 名栗二七五番

同

鳥居 観音 練馬区小竹町一ノ五二 平沼方 電話 九五五・〇四六五番

御一名様で観音像を何体申し込まれても差支えありません。

# GR 白雲郷 花のお知らせ

水と、空気が太陽、そして美しい自然は

信仰から……健康へ……結びつきます。

○梅とうぐいす 本堂の周辺の梅が咲いて、朝から

うぐいすが鳴いて、早春譜を奏でます。

○沈丁花の花の香りも漂っています。

○三つ葉つつじ（紫の花）が四月となりますと、新緑

の間に群生又は、点々と、年と共に大きくなった株が

皆競争して咲いて、訪づれる人々の瞳をたのしませま

す。この花は四月下旬まであります。

○紅つつじ（山つつじ）紫の花が終る頃、今度は紅のつ

つじが咲き出して、朝日夕日に映えて燃えるようです。

○山吹の花も樹下に又流れに沿った、参道の附近に咲

いて清らかな感を深めます。

○椿の花は、山内到着の処に一重の花を咲かせて、花が

こぼれるあたり風情があります。

○さくら 山の所々に、雲か霞か、と思われるのが、

山ざくらですが、ふもとの吉野ざくらよりおくれます

このさくらを山頂から眺めるのは又格別です。

○藤の花 つつじについて、本堂の入口に藤棚があり  
ますが、この藤も大きくなって、五月中旬からその花  
房が長くれたれ、花のさかりには、むせるような香にう  
っとりします。花の色の美しいのは空気がきれいなた  
めでしょう。

○朴はうの木の花……子育て地藏尊の下の山内には朴の木  
が点々とあつて、水々しい若葉の中から白い蓮の花に  
似た、清らかな花を咲かせます。

○あじさい あじさいと云えば、誰もが、美人を連想  
されることでしょう。いろいろな色に変化しながら、  
その花期も長く、花のない時季に当山の人氣ものの花  
です。

この花期を通じて、三蔵塔前の広場から眺められた  
時、身心共に清らかに、そして更に明日への力が倍加  
されるのです。

## GR 白雲郷とりの 第十八号

発行日 昭和四十六年四月一日 毎号定価貳拾円

編集兼 発行人 埼玉県入間郡名栗村鳥居観音 岡部千三

印刷所 浦和市仲町二一八一五 武州印刷株式会社

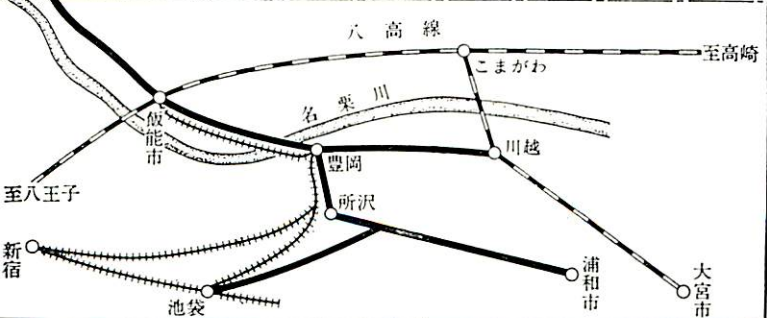
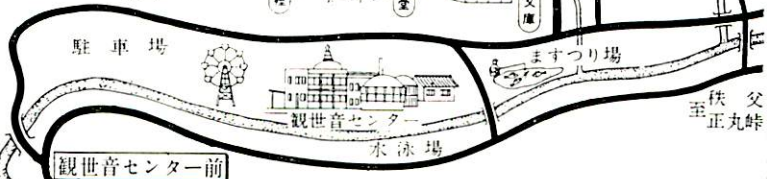
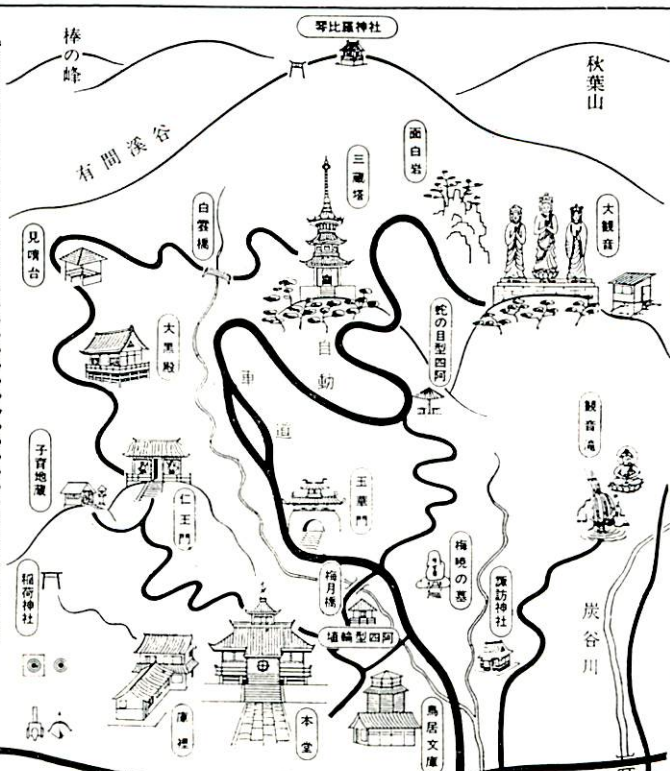
発行所 鳥居観音 電話〇四二九七〇四（二七五番）  
（五番）

鳥居観音東京事務所  
東京都練馬区小竹町一ノ五二 電話（九五五）〇四六五



# 白雲山 鳥居観音 案内図

鳥居観音 観世者センター案内図



## 春 季 例 祭

と き 四月十七日(土) 本堂法要 午前十時  
三蔵塔法要 // 十一時三十分

法要終了後、完成に近づいた救世大観音のご参観をいただき、次いで白雲郷の新緑と丁度さかりの「つつじ」の花をご探勝くださるよう計画しています。

## 救世大観音世話人会

と き 五月七日午前十時三十分  
ところ 救世大観音現地集合 現況視察し本堂にて法要  
其の視察後、庫裡にて役員会を開きます。

## 夏の行事のご案内

### 流 燈 法 要

と き 八月十六日(月) 午後5時 本堂内法要  
午後7時 流燈名栗河畔

別途流燈法要の御申し込みをいただくようご案内いたします。どうぞその節はご先祖様をはじめ、仏様のご供養のため、ご参加くださるよう今よりご案内申し上げます。

### 煙火大会と盆踊り大会

と き 八月十六日 午後8時 観世音センター下河原  
流燈法要に併せて、奉納煙火大会と盆踊り大会を計画いたしております。年と共に盛大になります。どうぞご期待ください。

### 名栗川プール開設

観世音センターが毎年夏の施設として、名栗川プールを開設いたします。公害のない場所で自然と健康を十分に守ってください。 開設 七月十五日